

口永良部島の火山活動解説資料（平成 21 年 9 月）

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

27 日に火山性地震が増加したことから火山活動が高まったと判断し、火口周辺警報を発表して、噴火警戒レベルを 1（平常）から 2（火口周辺規制）に引き上げました。

28 日に実施した上空からの観測では、新岳^{しんだけ}火口及びその周辺の地形や地表面温度分布に特段の変化はなく、新岳火口から引き続き噴煙が認められました。

口永良部島では、新岳火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生する可能性がありますので、火口から概ね 1 km の範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要です。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石にも注意が必要です。

○ 9 月の活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図 3、図 5）

遠望カメラ（新岳^{しんだけ}火口の北西約 3 km）による観測では、噴煙の高さは火口縁上概ね 50m（最高高度は 200m）で経過しました。

28 日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が第十管区海上保安本部の協力を得て、京都大学と合同で実施した上空からの観測では、新岳火口及びその周辺の地形や地表面温度分布に特段の変化はなく、新岳火口から引き続き噴煙が認められました。

・地震や微動の発生状況（図 2、図 3）

火山性地震は 27～28 日に増加しましたが、29 日以降次第に減少しています。月回数は 177 回（8 月：13 回）でした。震源は新岳火口直下のごく浅いところに分布し、これまでと比べて変化はありませんでした。

火山性微動の月回数は 6 回（8 月：なし）と少ない状態で経過しました。

・地殻変動の状況（図 3、図 4）

GPS 連続観測では、2008 年 9 月から続いていた新岳火口浅部の膨張を示す変化は、2 月頃から鈍化し 6 月以降認められません。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ（<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>）や気象庁ホームページ（<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>）でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 21 年 10 月分）は平成 21 年 11 月 9 日に発表する予定です。

※この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学及び独立行政法人産業技術総合研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 20 業使、第 385 号）。

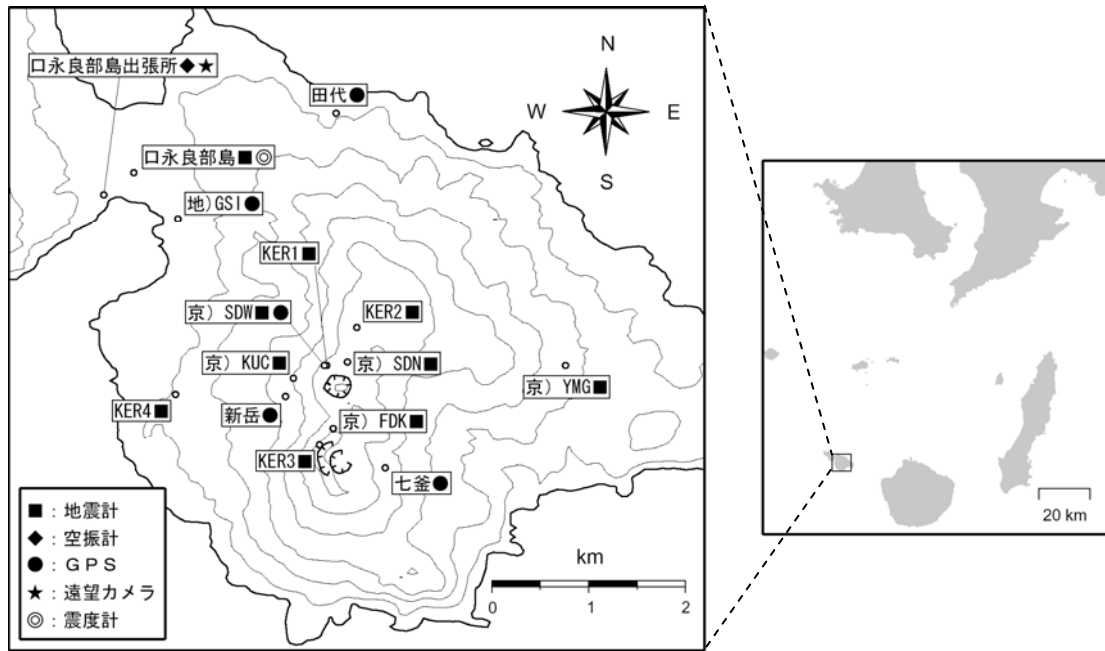
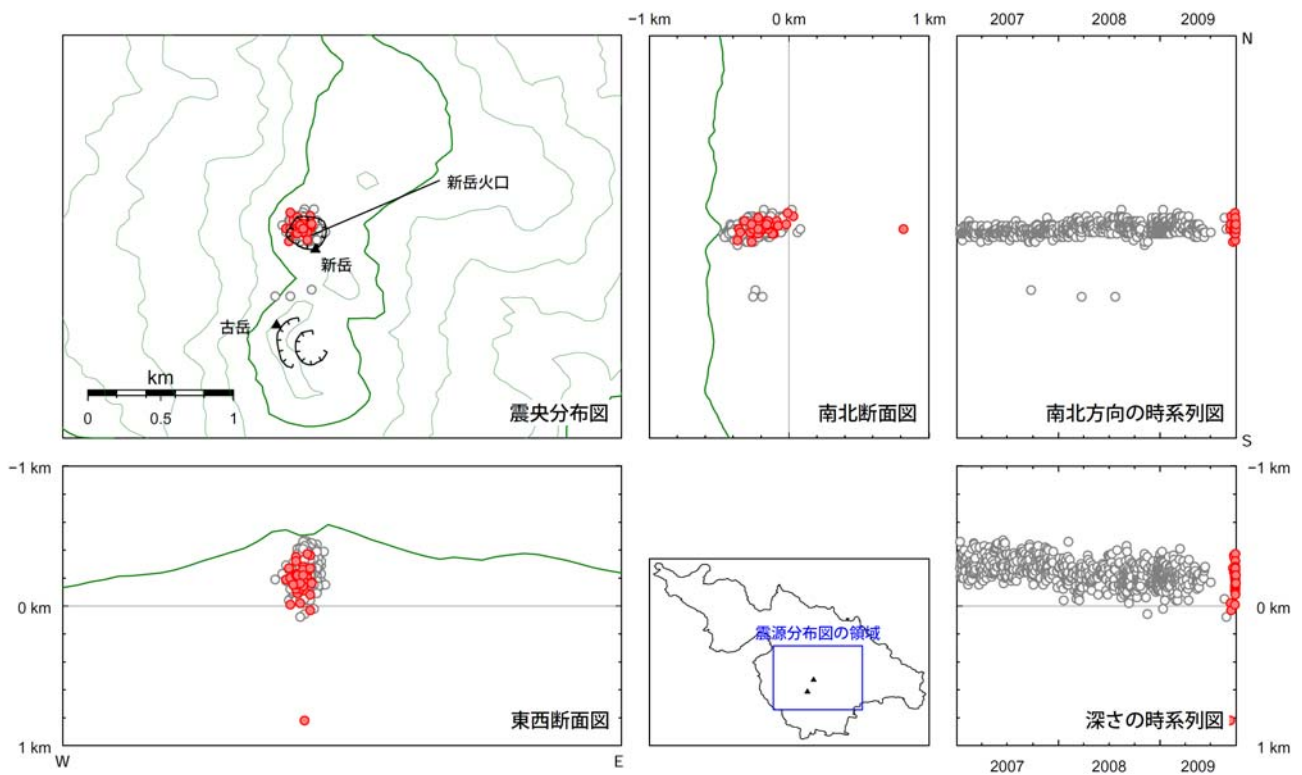


図 1 口永良部島 観測点配置図



- : 2009 年 9 月の震源
- : 2007 年 1 月～2009 年 8 月の震源

図 2※ 口永良部島 震源分布図（2007 年 1 月～2009 年 9 月）

< 9 月の活動状況 >

火山性地震の震源はこれまでと同様、新岳火口直下のごく浅いところに分布しました。

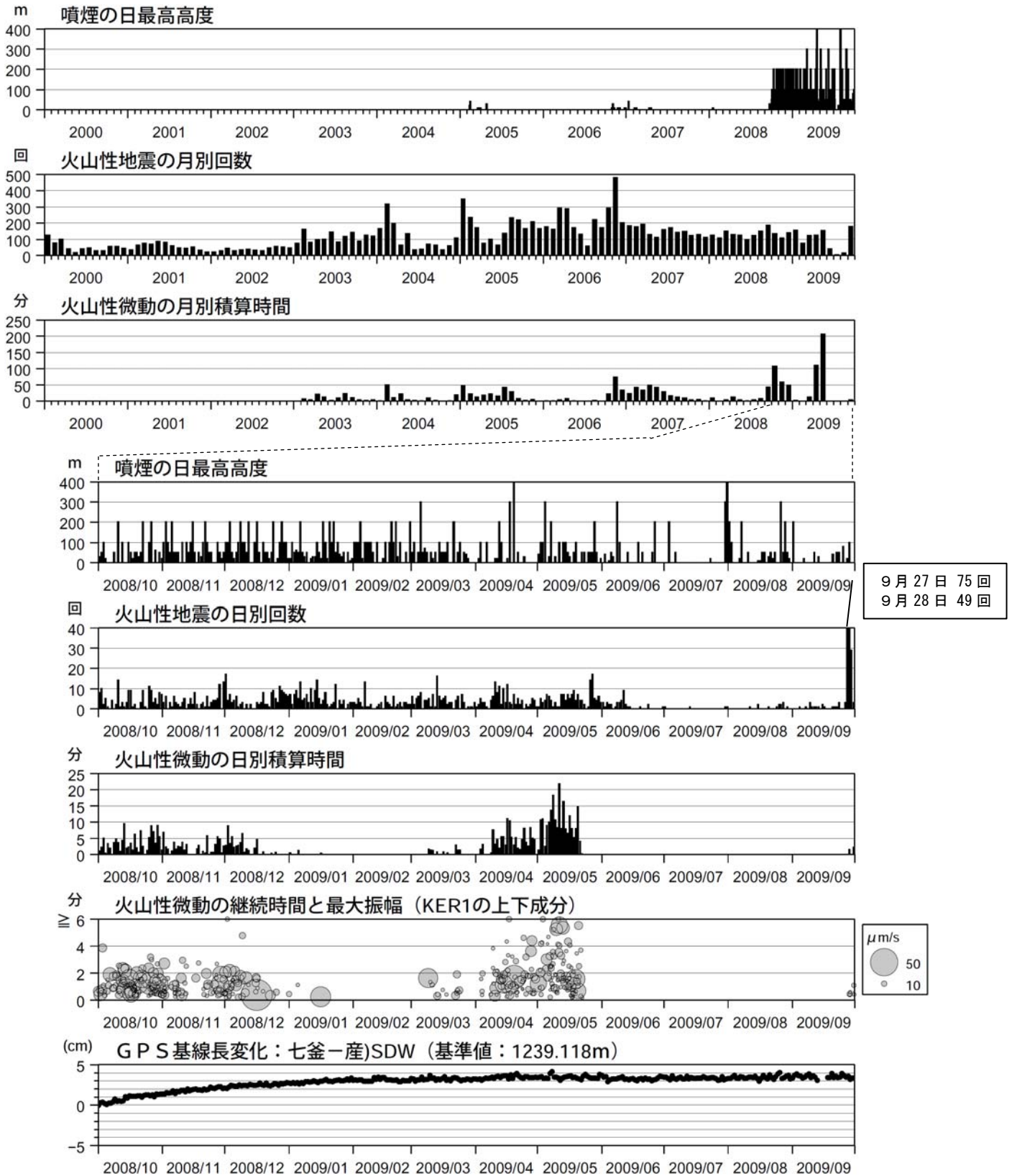


図3※ 口永良部島 火山活動経過図（2000年1月～2009年9月）

<9月の活動状況>

- ・噴煙の高さは火口縁上概ね 50m（最高高度は 200m）で経過しました。
- ・火山性地震は 27～28 日に増加しましたが、29 日以降次第に減少しています。
- ・火山性微動は少ない状態で経過しました。

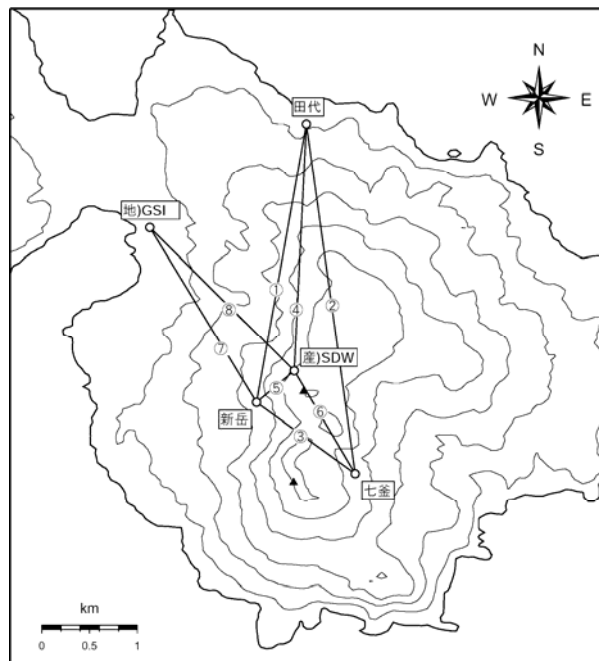
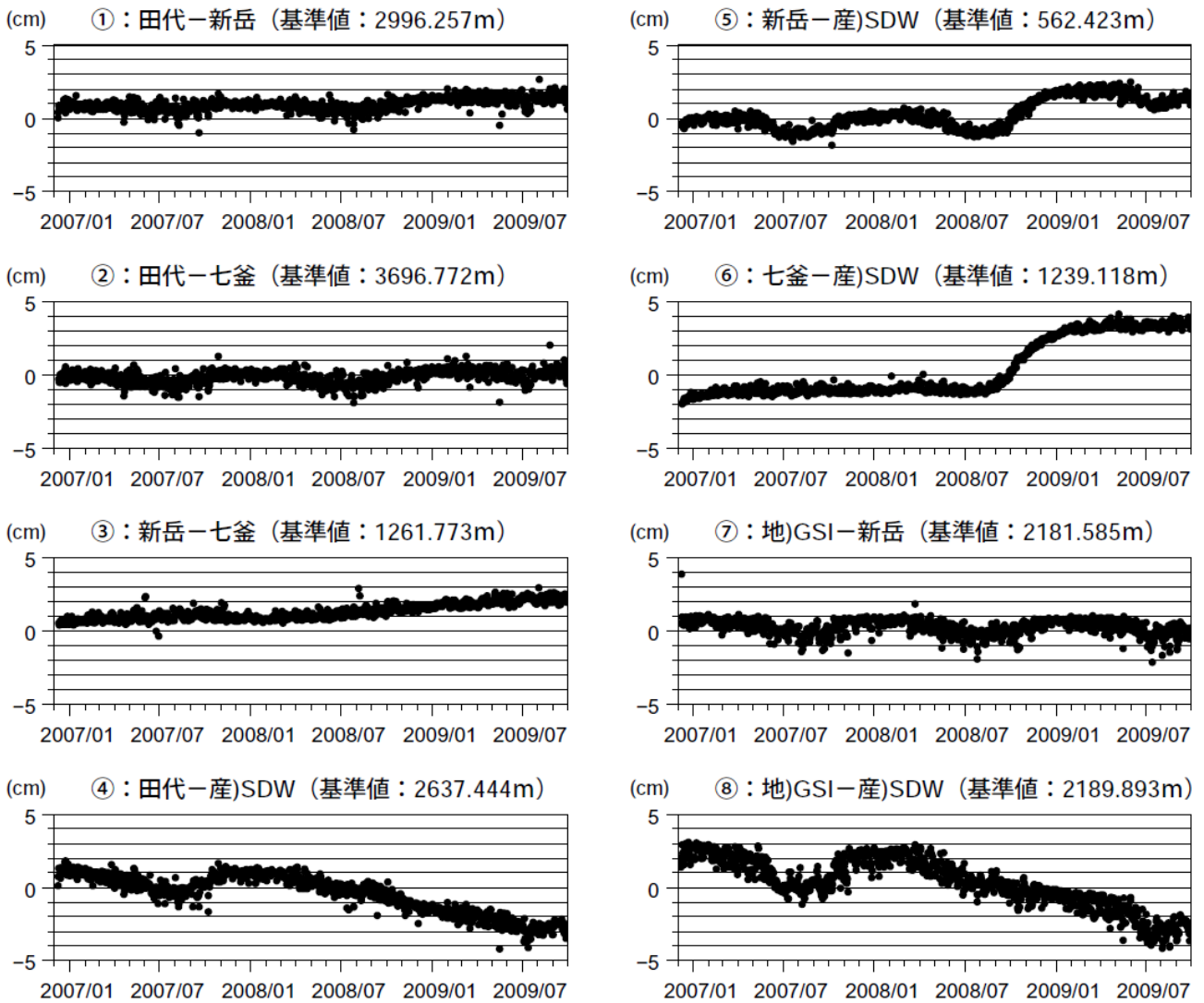


図 4※ 口永良部島 GPS 連続観測による基線長変化 (2006 年 12 月～2009 年 9 月)
 2008 年 9 月から続いていた新岳火口浅部の膨張を示す変化は、2 月頃から鈍化し 6 月以降認められません。

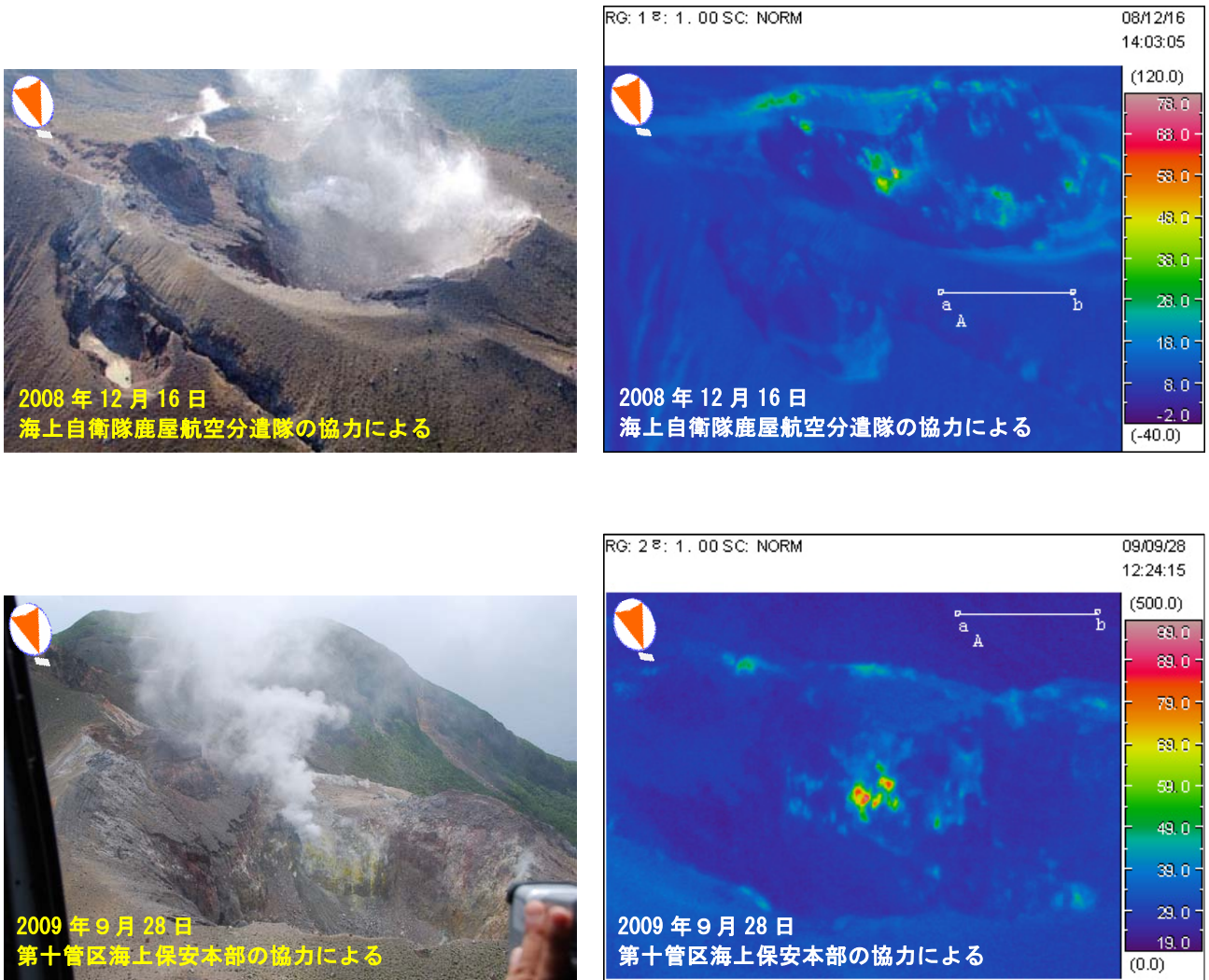


図5 口永良部島 赤外熱映像装置¹⁾による新岳火口の地表面温度分布

28日に気象庁機動調査班（JMA-MOT）が第十管区海上保安本部の協力を得て、京都大学と合同で実施した上空からの観測では、新岳火口及びその周辺の地形や地表面温度分布に特段の変化はなく、新岳火口から引き続き噴煙が認められました。

- 1) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感じて温度分布を測定する測器です。熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。